今週の為替相場見通し（2021年11 月1日）

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	（円）		113.26 ～ 114.31	114.03	113.00 ～ 115.00
ユーロ	（ドル）		1.1535 ～ 1.1692	1.1562	1.1400 ～ 1.1800
（1ユーロ=）	（円）		131.56 ～ 132.89	131.80	131.00 ～ 136.00
英ポンド	（ドル）		1.3669 ～ 1.3829	1.3685	1.3665 ～ 1.3815
（1英ポンド=）	（円）	*	155.71 ～ 157.77	155.99	154.75 ～ 156.75
豪ドル	（ドル）		0.7465 ～ 0.7555	0.7521	0.7400 ～ 0.7620
（1豪ドル=）	（円）	*	84.73 ～ 86.06	85.76	83.00 ～ 86.60

（データ）先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1．米ドル

市場営業部　為替営業第二チーム　逸見　久貴

（1）今週の予想レンジ：　113.00 ～ 115.00 円

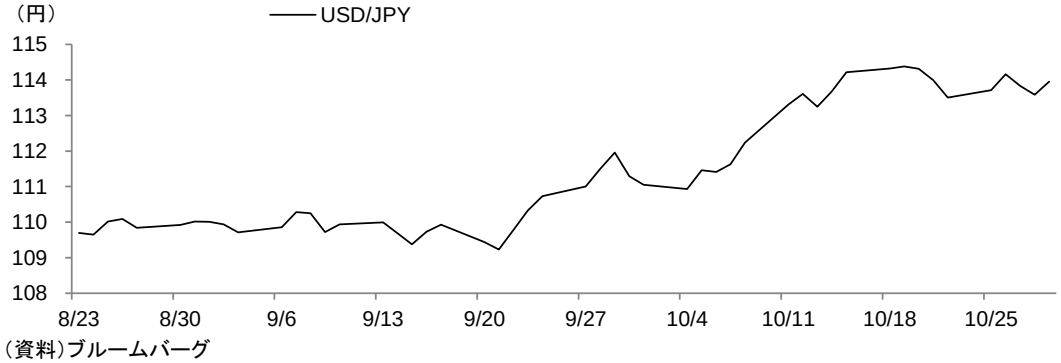
（2）ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円は上に往って来い。週初25日は113.67円でオープン。実需勢のドル買いに支えられ113円台後半まで上昇したものの、勢いは続かず113円台半ば付近まで下落。海外時間に入ると、米金利の上昇を横目にドル/円は再び114円台を目指したものの、金利が反転したことで113円台半ばへ反落。翌26日は株式市場が堅調に推移する中、リスクオンの展開。ドル/円は114円付近まで上昇した後、米9月新築住宅販売件数や10月消費者信頼感指数の良好な結果を受け、ドル買いが強まると週高値114.31円をつけた。週央は月末フローからやや軟調な展開となり、東京時間に114円を割り込んだ。海外時間に入り、欧米株や米長期金利が軟調に推移すると、リスクオフムードが強まり、ドル/円は113円台半ばまで下落。その後、EUとイランの核合意復活に向けた協議再開に関するヘッドラインを受け、原油の供給ひっ迫懸念が和らぐと原油価格が下落。ドル/円は113円台後半まで値を戻した。28日、前日からのリスクオフムードが根強く、ドル/円は軟調な展開。海外時間に発表された米第3四半期GDPが予想を下回ったことや、ラガルドECB総裁の発言がややタカ派と捉えられ、ユーロドルが上昇したこともあり、ドル/円は週安値113.26円をつけた。一巡後は米金利の上昇を背景に113円台半ばまで値を戻した。週末、月末要因からか米金利が低下する一方で、ドル買い優勢の展開。海外時間に114円台を回復し、114.03円で越週した。

今週のドル/円は114円を中心としたレンジ推移を予想。今月、IMFから示された各国の成長見通しは、主要国が5～6%程度に対し、日本は緊急事態宣言の活動制限の影響を反映し大きく下方修正されたうえ、2.4%と低い見通しとなった。先週の日銀会合では緩和策継続の姿勢が示されており、欧米対比、経済回復に遅れを取る状況は当面の間、改善される見込みは薄く、回復/成長期待の低い国の通貨である円を買い進める理由は見当たらない。リスクオフの場面であっても、ドル/円は113円台前半から半ばでは底堅さが確認されており、113円を割り込む可能性は低いであろう。一方で上値も重いと考えている。今週は2日、3日にかけてFOMCが開催されるが、パウエルFRB議長からは、テーパリング着手に意欲的ながらも、利上げは時期尚早との姿勢が示されている。供給制約の影響やインフレ動向の見極めが十分とは言えない中、利上げを急ぐ必要はなく、FOMCでは同議長の発言を踏襲した内容に留まるであろう。早期利上げ期待が盛り上げりに欠ける中、ドル/円が直近高値を更新し、115円を上抜けていく展開も想定し難く、ドル/円は上にも下にも大きくは動かないと考える。

（3）先週までの相場の推移

先週（10/25～10/29）の値動き：　安値 113.26 円　高値 114.31 円　終値 114.03 円



（資料）ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部　為替営業第二チーム　尾身　友花

(1)今週の予想レンジ:　1.1400　～　1.1800　　131.00　～　136.00　円

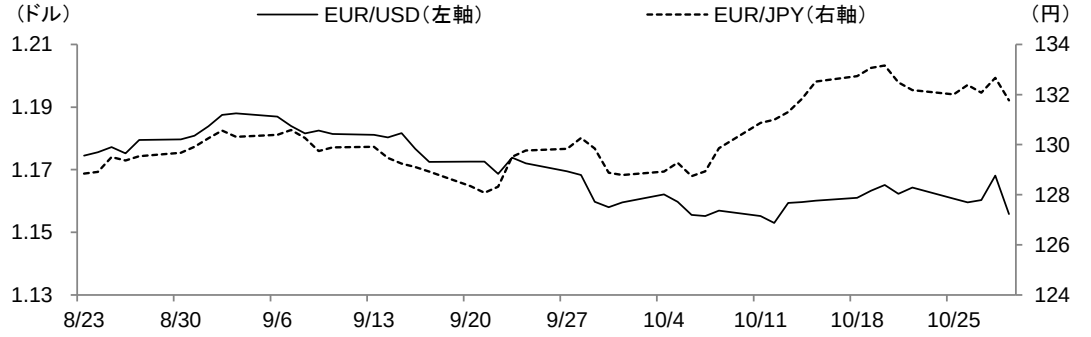
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は週後半に一時急上昇する場面も見られたが、結局下落した。週初25日、1.1640でオープンしたユーロ/ドルは海外時間に上値を伸ばすも独10月IFO景況指数の冴えない結果に急落し1.16を割り込んだ。その後、小幅に反発も戻りは鈍く、1.16台前半での小動きとなった。26日、ユーロ/ドルは欧米株の堅調推移に上昇するも、米経済指標の良好な結果にドル買い優勢となり1.15台後半まで下落。その後は1.16を挟んでの揉み合いとなった。27日、ユーロ/ドルはリスク回避の動きに前日の安値水準まで下落するも米金利低下と株価の持ち直しで1.16台を回復。その後はECB政策理事会を翌日に控え、調整中心の動きが続き1.16付近で小動きとなった。28 日、ユーロ/ドルは欧州時間に一時1.1582まで下落するも、米7～9月期GDP の冴えない結果やラガルドECB総裁の会見での発言がタカ派的と受け止められて一時週高値の1.1692 まで急上昇した。週末29日もユーロ/ドルは、1.16台後半で高止まりしていたが、海外時間に入ると米金利の上昇を受けたドル買いから下落。堅調な米指標の結果も手伝い一昨日の上昇を打ち消す形で下落し、一時週安値の1.1535をつけ1.1562でクローズした。

今週もユーロ/ドルは下落すると予想している。今週は米FOMCが予定されており、今回会合にてテーパリング開始が決定されると見られている。これにより、会合後はさらにドル買いが強まる可能性が高いと考えており、ユーロ/ドルは下落するのではないだろうか。また、ユーロ単体では、先週に開催されたECB会合後の会見にてラガルドECB総裁が、パンデミック緊急プログラム(PEPP)が2022年3月に終了となるだろうと意見を述べたことにより、ECBにおける利上げが意識された。ユーロ/ドルは一時的に急反発したが、同会合にてラガルドECB総裁はインフレ圧力が来年度は緩和するとの見立てを述べており、実際に利上げの議論が開始されるまでには時間がかかると見ている。この為、FOMCにてテーパリングが決定されれば、再びドル買いユーロ売りが一段と強まるのではないだろうか。今週の経済指標等としては、1日（月）欧10月製造業PMI（確報）、3日（水）欧10月非製造業PMI（確報）、欧9月失業率、米FOMC政策発表、4日（木）欧9月PPI、英BOE金融政策会合、5日（金）欧9月小売売上高が予定されている。米FOMCにてテーパリングが決定されるかに加えて、英BOE会合にて利上げを予想する向きもおり注目が集まる。英BOEにて利上げが決定されると、世界的な政策金利引き上げへの期待に拍車がかかり、本予想に反してECB利上げ期待を背景としたユーロ買いが強まり、ユーロ/ドルは硬直するシナリオもあるかもしれない。その際は、対円でユーロが強含むことになるだろう。

(3)先週までの相場の推移

先週（10/25～10/29）の値動き:　（対ドル）安値 1.1535　高値 1.1692　終値 1.1562
（対円）安値 131.56　高値 132.89　終値 131.80



（資料）ブルームバーグ

3. 英ポンド

欧州資金部　本多 秀俊

(1)今週の予想レンジ:　1.3665 ～ 1.3815　　154.75 ～ 156.75 円

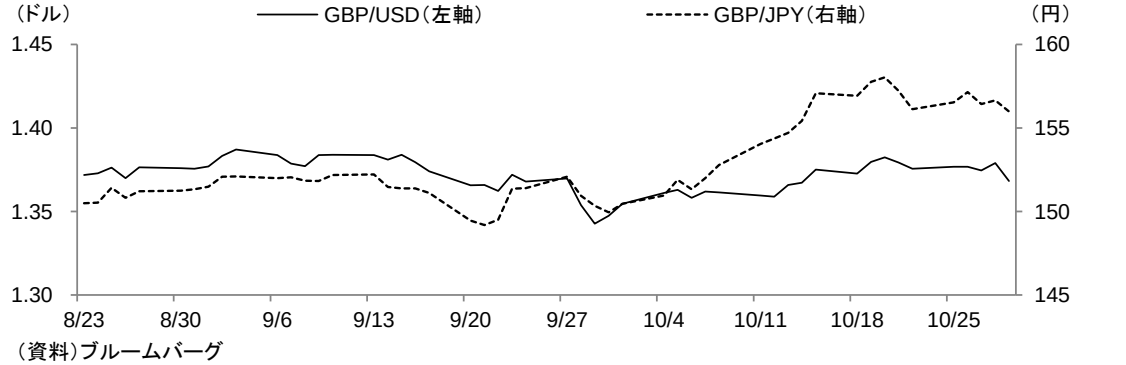
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、対ドルでは週引け間際の急落を経て明確に水準を切り下げた。対円では、引き続き(英国民投票が実施された)16年6月来の高値圏にあって、週央に掛けて明確な上昇→反落が先行、その後はじり高に推移したものの、週引け前にはやはり急落、結局、週を振り返ってほぼ横ばいに終わった。対ユーロでも20か月ぶりの高値圏にあって堅調推移が先行、26日までに0.8403まで高値を更新したものの、その後頭打ち、28日以降、下押し→反発し、週を振り返ると、僅かに水準を切り上げて終わった。ポンド上昇局面で材料視されたのは、引き続き、英中銀による早期利上げ観測。25日には、同銀金融政策委員会のテンレイロ委員が「利上げの効果が現れる頃までに、供給障害(インフレ要因)の影響が消えている可能性もある」と、早期利上げに慎重な姿勢を示したものの、ポンドは反応を示さなかった。逆に、26日発表された英産業連盟(CBI)の10月小売売り上げ調査の大幅上振れなどに、殊更ポンド買いで反応したのも、利上げ観測という追い風があっての値動きと考えられた。前後してのポンド上昇→反落は、リスク許容/回避といった漠然とした地合に煽られた円全面安→全面反発に連れたポンド/円の上昇→反落に牽引された値動きに見えた。また、週後半のポンドじり高→急反落(対ユーロを除く)は、並行したユーロ急騰→急反落に連れた値動きと考えられた。欧州中銀ラガルド総裁が、28日、高インフレの長期化に警戒感を示したことで、欧州中銀早期利上げ観測が台頭、ユーロは全面急騰したが、同時に同総裁は、「市場の利上げ織り込みは欧州中銀のフォーワードガイダンスと合致しない」とも述べており、同発言を咀嚼することで、ユーロは週引けにかけ大幅に反落、連れてポンドも大きく水準を切り下げた。

今週の英ポンド相場は、4日(木)の英中銀金融政策委員会次第。エコノミスト予想は基準金利の15bp利上げと0.10%据え置きの間で割れているが、英短期金利市場は0.25%への利上げを織り込んだ状態にある。15bp利上げが実施された場合、もう一段のポンド上昇余地はあるかもしれないが、「噂で買って、事実で売る」反応が見られる可能性が高い。一方、利上げが見送られたり、小幅利上げにとどまったりした場合には、相応にポンドが売り込まれる、非対称な反応が警戒される。金融政策委員会が割れる(全会一致の決定とはならない)のはほぼ確実と見られるが、仮に利上げに踏み切るとしたら、これまでにベイリー総裁らから相次いだ「利上げ予告」発言に促された利上げ期待を、今更、裏切れない状況が大きな動因のひとつになろう。一方で、上述テンレイロ委員のように、供給要因による物価上振れを一時的と見るのであれば、今しばらくの物価動向見極めは、利上げ見送りの要因となろう。先週(27日)発表された英秋季予算は、事前に想定された程緊縮的ではなかったものの、9月に発表された増税(社会保険料率引き上げ)、9月末で終了した一時帰休(賃金補償)の影響、高水準が続くコロナ禍情勢なども見極めたいはずだ。興味深いのは、ロシア中銀、ブラジル中銀などの新興国中銀が、相次いで積極的な利上げに踏み切る一方、米連銀、欧州中銀など、主要国中銀が利上げ開始に極めて慎重な姿勢を示している事実。英中銀の利上げ開始時期を見極める上でも、英経済が、ロシアやブラジル側の経済なのか、米やユーロ圏側の経済なのかという目線は参考になるのではないか。ワクチン接種で先行し、量的緩和撤回でも先行したカナダで、先週(27日)、中銀が政策金利引き上げの「前倒し」を示唆したが、そのカナダ中銀ですら、現時点で検討されているのは、最速で来年4月の利上げ開始という。経済規模や、過去のインフレ推移、期待インフレ率の振れ幅などに鑑みれば、英経済は「先進国」の一部に位置付けられると思われる。金融政策だけが新興国並みということが、有り得るようには思えないのだが、果たして、英中銀はどのようなスタンスを取るのか注目したい。

(3)先週までの相場の推移

先週(10/25～10/29)の値動き:　(対ドル) 安値 1.3669　高値 1.3829　終値 1.3685
(対円) 安値 155.71　高値 157.77　終値 155.99



(資料)ブルームバーグ

4．豪ドル

アジア・オセアニア資金部　シドニー室　川口　志保

(1)今週の予想レンジ:　0.7400　～ 0.7620　　83.00　～ 86.60　円

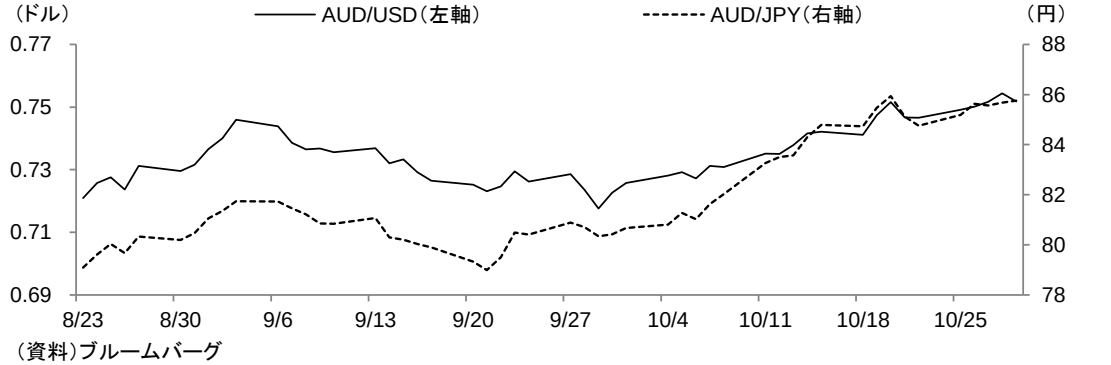
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週月末週の豪ドルは豪債券市場大荒れの中、0.74半ばから0.75半ばへと上昇した。25日はWTI原油先物が一時2014年以降初の$85/brlを突破し、エネルギー輸出国通貨の豪ドルも支えられた。27日豪3Qのコアcpiが前年同期比で2.1%となり、豪中銀の目標レンジである2～3%に入った事で利上げ時期の前倒し期待が高まり、0.7535近辺まで上昇した。以降月末にかけては22日以来RBAが利回り目標防衛の豪3年債買い入れオペを発表せず、債券市場が大混乱となり、豪3年国債利回りは0.81%まで跳ね上がった。一方、為替市場では0.7500-0.75半ばまでの比較的ナローレンジで推移し、債券市場からの影響は限定的であった。豪9月小売売上高は前月比・前年同期比でプラスとなっていたがほぼ無反応で通過した。

今週の豪ドルは底堅く推移する展開を予想する。2日（火）のRBA理事会もしくは5日（金）の豪金融政策報告ではインフレ見通し及びフォワードガイダンスの修正に関する発表を行う可能性が高いと予想する。但し、今回のRBA理事会で豪3年債利回り目標が撤廃する方向に動く展開になったとしても供給制約から派生したインフレの影響の解消時期が見えないまま利上げの時期を明確化することを避ける可能性が高いとみる。また、豪中銀が利上げ条件としてみている項目は1)インフレが持続的に2～3%のレンジで推移する事、2)雇用環境が引き締まっている事、3)賃金上昇が伴っている事などがあるが、1)は今後目標レンジで推移するかを考察としても、2)に関しては労働参加率の回復も待たなくてはならず、3）に関しては上昇ペースはまだ緩やかとみられている為、利上げへの十分な理由がそろっておらず、RBAが利上げに行き急ぐ必要はない。いずれにせよ、ひとまずRBAによるインフレ見通し上方修正が行われれば、利上げ時期の前倒し期待が引き続き継続し、豪ドルは底堅く推移するとみる。チャート上では直近0.7560近辺にあるフィボナッチの半値レベルと200日移動平均で上昇が抑えられている為、この水準を上抜けできるか試されよう。ちなみにこの上は7月6日の高値が0.7599にあり、0.76台も視野に入ってくる。資源価格上昇も手伝えば0.76台もそう遠くはないとみる。豪ドル/円に関しては10月21日に付けた年初来高値86.255を再度更新すると期待する。月初は2日（火）:RBA理事会、3日（水）:NZ金融安定報告書、NZ雇用統計、米10月ADP雇用統計、4日（木）:FOMC、豪9月貿易収支、5日（金）:RBA金融政策報告、米10月雇用統計等が予定されており、値幅が広がる可能性は十分に期待できよう。

(3)先週までの相場の推移

先週（10/25～10/29）の値動き:　（対ドル）安値 0.7465　高値 0.7555　終値 0.7521
（対円）安値 84.73　高値 86.06　終値 85.76



（資料）ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようにお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。